宝の海から

白浜で出会った生きものたち

⑪

京都大学助教授　久保田　信（京都大学瀬戸臨海実験所）

田辺湾は世界分布の北限

大形タカラガイの打ち上げ

7月22日、白浜町臨海の北浜に、珍しいホシダカラガイの貝殻が打ち上がった。殻の大部分が欠けていたが、写真のように口側と周囲は残っており、長さ95ミリもあり成貝であることが分かった。

タカラガイ類は熱帯や亜熱帯の海の代表である。つやのある色模様の貝殻は、まさに自然の芸術品である。安産のお守りとして使われたこともあり、子安貝とも呼ばれる。かぐや姫が出した難題のひとつ『ツバメの子安貝』は有名な話だ。

タカラガイ類のほとんどの種は小形で、人のつめくらいのものが多い。ホシダカラガイは田辺湾産の最大種で、貝殻の長さは10センチ超に達する。これほど大きなものなら、多数見つかってもおかしくないが、まれにしか捕れないのは生息数がかなり少ないからだろう。

田辺湾周辺海域でのホシダカラガイの記録は、1974年以降の25年間でわずか13個体でしかないことを、瀬戸臨海実験所職員の田名瀬英朋さんと樫山嘉郎さんの3人で南紀生物41巻（99年）で報告したことがある。これまで報告した成員はたった2個体だけだったので、今回の発見は貴重な記録となった。

各地での調査から、ホシダカラガイは三浦半島以南で記録されているのだが、成員の分布の北限は田辺湾であることが分かった。しかも、この種の分布の世界の北限ともなっており、貴重な記録なのである。

◇

北浜には、田辺湾周辺海域に生息するタカラガイ類の大半にあたる20種余りが打ち上がっている。本場の沖縄だとこの倍以上の種類がいる。世界中では200種ほどが知られるが、そのほとんどがインド洋と西太平洋に生息している。

南西諸島に行くと、生きたホシダカラガイが観察できる。生体では、軟体部の外套（がいとう）膜がすっぽり貝殻をおおうので、一見するとこの種だとはわからない。一般にタカラガイ類の外套膜は、突起だらけで、貝殻の色彩とは無関係な色合いと模様が入る。特徴ある貝殻を隠したホシダカラガイも、生きている時を知っていなければ、一見すると大きなウミウシ類としか見えないだろう。

串本町で今原幸光さんが、7月中旬に水深12メートルから捕獲したホシダカラガイが、県立自然博物館で飼育展示されているので見に行かれると良い。

◇

タカラガイ類の外套膜は、貝殻の背中側中央で両側からあわさるのだが、巻貝類でこのようなものでは、厚くて丈夫な、ややかなものに仕上げてゆく。真珠貝やアワビなどを除き、どのような貝殻のつやつやと磨かれた内側よりもタカラガイの特徴をもっているものはまれで、マクラガイ類くらいである。このようなむきだしの外套膜は貝殻をだんだんと上塗りする。

タカラガイ類は、軟体動物の中では巻貝類に属するのだが、成員の貝殻は美しい。

81年1月6日に死亡した。ホシダカラガイは南方系の貝なので、野外と同温の水槽では、当時の冬季の低水温に耐えられなかったからである。

◇

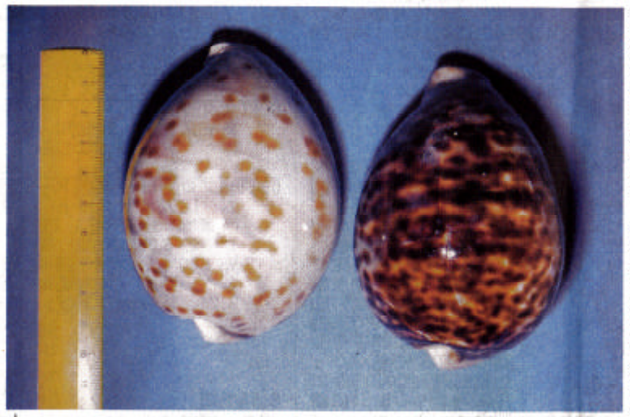
タカラガイ類の生活史の概略はほぼ分かっている。雌親が卵嚢（らんのう）を岩の裏などに産み付け、ふ化するまで守っているように、タコの雌親が卵塊を守るのと同じ母性愛を示す。手厚く保護されたタカラガイの卵は、丈夫なカプセル内で発生を進め、羽のような面盤（めんばん）をもったチョウのようなベリジャー幼生に成長する。この小さなプランクトン性の幼生は卵嚢から海中に出て、海流に乗って分布を広げる旅に出る。ホシダカラガイも、遠く南西諸島の亜熱帯の海底で生まれ、黒潮に乗って紀伊半島沿岸にやってきているはずである。だが、海底に落ち着いて、せっかく小さな貝に育っていても、冬季の水温が低い年には凍死してしまう。北限分布の海域ではこのような盛衰は否めない。

これまで田辺湾周辺で発見されたホシダカラガイ13個体のうち2個体の幼貝は、76年の寒波で死亡したものである。2月に北浜で発見されたのだが、1月下旬に海水温が11度まで低下したため、28種合計13325個体ものタカラガイ類が大量死し、この中に混じっていた。

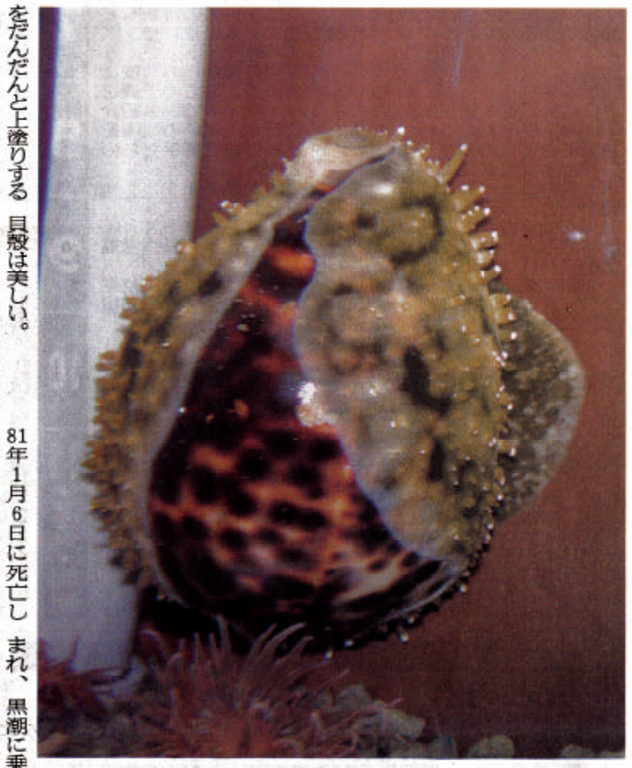
残念ながら田辺湾周辺でホシダカラガイの生きたものを発見するチャンスはまだ少ない。南紀生物誌41巻で報告した通り、たった3個体の幼貝だけが生きたまま捕獲され、あとは死んだ殻ばかりである。ただ1個体だけだが、貝殻の中に腐臭がする軟体部がまだ残っている幼貝もあった。このような状態での記録も生息を記録する重要な証なのである。

円月島で1980年に生きた状態で捕獲されたホシダカラガイ幼貝の貝殻（田名瀬英朋さん所蔵）

北浜に今年7月22日に打ち上がったホシダカラガイ成貝の貝殻



田辺湾周辺海域で発見されたホシダカラガイの死殻。左は成体になりかけの重さの軽い亜成貝（田名瀬英朋さん採集）。右は成貝



和歌山県立自然博物館で飼育展示中のホシダカラガイ生体（今原幸光氏採集・撮影）